

日本の神話：神々の終焉

オノゴロ島でイザナギとイザナミは、自分たちの身体の造りが違うこと、つまり子孫を残す能力を持っていることに気づきます。神々は再会するまで島の天柱を反対方向に周ることにし、再会したらイザナミがイザナギを床に誘いました。子供が二人産まれましたが、二人とも異形で生命力がありませんでした。惑ったイザナギとイザナミは、天つ神の助言を受けることにしました。彼らは、イザナミが先に声をかけたことが異形の子供の原因であったことを理解します：女性ではなく、まず男性から声をかけるべきでした。

この物語についてはいくつかの注釈がありますが、そのほとんどは、中国の哲学、8世紀に神話を書き留めた法廷学者、特に儒教が影響を与えたことを示唆しています。当時の日本では、エリートの間で儒教が定着していました。儒教は男性の優位性を強調し、女性を社会の中で劣った存在として捉えました。イザナミやイザナギの物語に盛り込まれた女性の行為主体性に対する警告は、神話が書かれた社会の文脈の中で理解されなければなりません。イザナミの死産の話は、古代社会における早産と乳児死亡率の高さを反映している可能性もあります。